



Title	肥筑方言における「サ詠嘆法」の記述的研究
Author(s)	濱中, 誠
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49441
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	はまなかまこと 濱 中 誠
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 22622 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	肥筑方言における「サ詠嘆法」の記述的研究
論文審査委員	(主査) 教授 真田 信治 (副査) 教授 工藤眞由美 准教授 渋谷 勝己

論文内容の要旨

本論文は、肥筑方言の「サ詠嘆法」を対象に、その総合的な考察を試みたものである。「サ詠嘆法」とは、肥筑方言域に存在する、「山のウツクッサー<山の美しいことよ>」のような独特の感動表現形式のことである。

論文は、2部構成で、400字詰め原稿用紙にして約750枚の分量である。

第Ⅰ部「肥筑方言における『サ詠嘆法』の実態」では、第1章（「サ詠嘆法」研究の現在－先行研究とその問題点－）と第2章（調査概要）で概観を述べ、第3章（「サ詠嘆法」の実態とその特質）において、臨地調査によって得られたデータを詳細に分析している。文法実態として明らかになった点は以下のようである。(1)「サ詠嘆法」は単文でも複文でも出現するが、複文の出現率は低い。(2)最も出現頻度が高いのは、単文の一語文型である。(3)〈体言＋助詞＋「－サ」〉の形式において用いられる助詞には、ノ・ガ・ワ（は）などがあるが、なかでもノが圧倒的に多い。(4)「－サ」が所謂文末助詞を伴うことはまれである。(5)副詞を伴う例がかなり見られる。また、表現実態として明らかになった点は以下のようである。(1)「サ詠嘆法」は、独白に用いる表現である。また、心内語としても用いられる。(2)聞き手を誉めたり、陰口に用いたりすることが例外的にある。(3)「サ詠嘆法」は、程度が強調されているように感じられることが多い。(4)「いま・ここ」で示されるような、現場性の非常に強い表現である。(5)判断（判定）の形式としては用いられることがなく、感動表出専用の形式である。

第Ⅱ部「『サ詠嘆法』の史的・理論的考察」では、第4章（「サ詠嘆法」と「さ語法」）と第5章（「サ詠嘆法」の本質－感動の喚体句論の再吟味－）で、「サ詠嘆法」の史的・理論的側面を考察している。「サ詠嘆法」と萬葉集などの古典に見られる、いわゆる「さ語法」の実態を整理しつつ、両者の比較、対照を行った結果、文法的特質において、(1)

〈名詞＋の＋「－サ」〉が最も多く典型的と考えられる、(2) 連体形が直接「－サ」に接しない、(3) 所謂文末助詞が接することが少ない、などの点において共通性が確認され、表現的特質においても、(1) 感動を表出する、(2) 感動表出の力価が高い、(3) 独白・心内語に用いられる、(4) 現場性が高いなどの点において共通性が確認され、両者がほとんど相違点のない事象であることが明らかになった。なお、「感動の喚体句論の再吟味」に関しては、いわゆる山田文法における感動の喚体句についての論を整理し、「サ詠嘆法」と対照することによって、その文法的位置づけを明らかにした。そして、山田文法の一部論考に見られる「－サ」を用いる感動の喚体句の成立方式のうち、「連体修飾語が必須である」という定義について、これを批判し、連体修飾語は必須ではないという発展的解釈を試みている。最後に、当該事象について、「サ句法」と名づけるのが適切であるとする新しい呼称案を提出している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、九州の肥筑方言域において現在も使用が確認されている、「サ詠嘆法」と呼ばれる事象について、その文法的・表現的特質を詳細に記述しつつ、両特質が、萬葉集などの古い時代の文献に見られる、いわゆる「さ語法」と同類型のものであることを対照言語学的に確認したものである。従来、それぞれの特性分析も行わずに、単に古代語法との同一性を前提とする研究が多く存在するのであるが、そのいずれにおいても両者の類型論的な対照はなされてはいなかった。その点で本論文の分析は高く評価することができるのである。

ただし、「さ語法」については、国語史的に見て変化が顕著であるとされる資料に限定しての考察に終始している。そこには、どのような根拠によってその資料を対象にしたのかについての吟味が欠けている。今後、広く多様な資料について、検討、分析することが必要であろう。また、「サ詠嘆法」の文法的な基本性格の考察についてであるが、確かに、これを山田文法における感動の喚体句と認定する先行研究が複数存在し、そのいずれもが両者の異同を詳細に検討した上での認定を行ったものではない点において、本論文は百尺竿頭一步を進めたものと認めることができる。しかし、山田文法における感動の喚体句への批判的言辭に関しては、本論文の内容としてはやや唐突の感を禁じ得ない。

今後の課題はあるが、本論文は、肥筑方言域に存在する「サ詠嘆法」に関して、緻密な現地調査とともに、先行研究を詳細に整理、分析し、現象記述のための学術用語に齟齬が生じていることを指摘するなど、斯界に貴重な貢献をなすものとなっている。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。